

《第 462 回 (2019 年 4 月 11 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者：8 人 文書参加：1 人

時間：10:00~11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『アカネヒメ物語』

村山早紀／著 徳間書店

物語の始まりは、2001 年春。小学校 4 年生のはるひは引っ越し先の土地で、古い桜の木を依り代とする神様、アカネヒメと出会います。このアカネヒメは、神様界でいうとまだ見習いレベル。神としての力が弱いため、木から離れて自由に動くことができません。戦争の時代には、街の人が傷ついていく様子をただ見ていることしかできなかったアカネヒメは、どことなく無常感や寂しさをまとっていました。そんな孤独な神様は、はるひと出会い、友情を築いていきます。

物語中では、この二人と、街の人たちとの交流が描かれています。温かいふれあいは、過去や未来について思い悩む人たちの心を癒し、一步踏み出す勇気を与えるきっかけを作っていきます。重く悲しい出来事があったにしろ、また、今も明るいことばかりではないにしろ、未来は絶対に良くしていこう！という強いメッセージが感じられる物語でした。

この『アカネヒメ物語』は、2001 年から 2005 年まで刊行されたシリーズを、書下ろしを加えて文庫化したものです。物語の中では、同時多発テロや鳥インフルエンザなど、当時の時事ネタがさりげなく盛り込まれていて、平成中期の時代感を反映したものになっています。

続いて、読書会に参加したみなさんの感想をご紹介します。

●先に文庫で読み、あとがきを読んでシリーズものを 1 冊にまとめたものだと知った。ファンタジー色のある話や、近未来が舞台になる話など、いろんな要素が入っていて、一つ一つが楽しめた。普通の女の子のはるひが、義務感ではなく、「友達だから、好きだから」という理由でアカネヒメに会いに行くのがいい。

●アカネヒメのことを、誰もが見えるわけではないというところが面白い。クリスマス話の最後のシーンでは、笑顔は財産だと思った。一つ一つの言葉がきれいで、表現もおしゃれ。幸せが空から降ってくる、という言い方は、そんな発想があるのか！と驚いた。温かさを感じる本だった。

●小学生の女の子視点での描き方や、読者の気持ちが寄り添っていけるような言葉遣いで、スムーズに物語に入り込めた。この土地から動けなくても、日々世界

の悲しいニュースが入ってきて、何かできることはないかと感じることもある。アカネヒメも、同じように感じていたのだと思う。

●物語の随所に、自分が昔経験したような思い出がある。公園に行った時のことや、友達とのいざこざ、男の子とのやりとり等…。そういう日常を懐かしく思うかたわら、テロなど、大人になってからの経験も重ねて読めた。「未来がある人間には、幸せになる義務がある」という言葉は、死ぬまで心に留めておきたい。

●ドキドキする事件が盛り込まれていて、興味をひかれる。でも、いずれ二人は別れてしまうというのが物語の根底にあって、全編の中に寂しさがある。だから、「命は大事に」というメッセージが引き立つ。別れがあるから次があると、はるひたちの気持ちが前向きに変わっていったのが良かった。

●表紙は YA 向けに見えるが、内容は小学生向き。YA 向けのわりには描写や重みが少ないと思っていたら、元の本があることを知り、納得した。挿絵がないと、自分の中でイメージが描いていけないので、イメージを得るためには元の本が必要だと思った。文庫になったらもったいない。

●はるひの母も祖母も、アカネヒメのことを知っているということは、その世代にも、アカネヒメに出会えた子どもがいたのかな。多感な時期の女の子の成長が、いろんな描かれ方で伝わってくる。時代の動きをさりげなく描写しているのは力量だと思う。最後には、登場人物の夢や希望が見つかって、良かった。

●今回私に届いたのは、「あやまるって許してもらうためにすることなの？その人を傷つけて、自分はわるく思っているってことを、伝えるためにすることじゃないの？心をこめて、思いを伝えるのがいちばん大切なことじゃないのかな？」という青空さんの言葉。確かに！と今更ですが納得！

次回 5月9日(木) 10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『ガラスの梨 ちいやんの戦争』 越水利江子／作 ポプラ社